

4
部落問題文芸作品選集

想夫

部落問題文芸作品選集

第4卷

渡辺霞亭
想夫憐

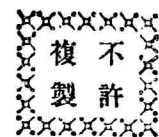
世界文庫版

明治三十七年二月一日印刷 明治卅八年四月十二日四版
 明治三十七年二月四日發行 年七月十八日五版
 全 年九月九日再版 全 年九月十日六版
 明治三十八年二月廿三日三版 全 年十二月十五日七版

著 者 黑 法 師

發 行 兼 刷 者
 瀧 川 民 治 郎

日本橋區馬喰町三丁目十四番地



(錢五十四金價實)

發 行 所
 今 古 堂 書 店

日本橋區馬喰町三丁目十四番地

は し が き

想夫憐は何んの爲に作られたるぞ、世の所謂善男善女を得度せん爲か、あらず、美の神髓神腦を説くが爲か、あらず、想夫憐一編は現代社會の有様を直寫せるなり、位階のみ高く、地位のみ高く、然も心も行爲も無下に卑しき人あらば如何、素姓のみ惡く階級のみ卑く、心も行爲も勝れて高き人あらば如何

今の世は是等兩端の人々に向つて如何の態度をか取れる、如何の待遇をか爲せる、人情理義に背きたる所なきか、言ふ所行ふ所に差う事なきか、千百万人中もし富を捨てゝ義を取るものあらば、即て此書の爲れる眞意を知らん

穴かしにく

辰年の春

黒法師 密に記す

想夫憐

黑法師作

(一)

吉田お玉が十六歳の初奉公に、好き便手ありて、京都三本木岩崎家の奥様の小間使に上りたるは、さる年の三月五日、雛祭漸く終りて、庭の白桃唇を解く折なりき

岩崎家の當主の名は一彦と呼ばれて、今年の三十六、以前の東海道の大藩に事へて、親の眞彦の勤王の事蹟に譽れ高く、死後に從四位を贈られたる程なれば、一彦も一間違は、亡父の忠節を思し召されて、殊に華族にも列せらるべきを、大學在學中重き心臟病に罹りて、卒業間際といふに退校したる後、再び世間の事に交はらず、親の遺産多くを移して、京都加茂川の邊り、山媚び水明なる處に新邸を構へ、母の貞子刀自とて六十近きを奉じ、妻の雅子とて花の如き美しきを携へ、月日を風流閑雅に送る如く見すれば、人は岩崎一彦の名を忘れて、普通の若き隱者の如く見過せど、この閑なる邸の中にも辛き浮世の風は

吹荒み、金あり、母あり、美妻あり、天が下にあらゆる幸福を、其身一人の手に集め握りたるが如き果報者の主人の胸にも波は立ちて、口さが無き京童に甲斐なき噂は立てられぬ、斯る家、斯る人の心の底を掻き亂すは何ぞ、戀か、利慾か、將た義理か

お玉は此美しき細君雅子のお付として抱ねられしなりき、お目見得終り、相談整ひて、始めて奥様のお側へ召されし時、彼女は奥様の沈みたるお詞に、左の如き申付けを聞きたり

常に小間使の部屋と定められたる二階の一室に詰め居りて、呼鈴二ツを鳴らせし時、必ず速に私の居間へ参るべき事、呼鈴の一つ鳴るゝ旦那様、二つ鳴るゝ我身、多く三つ鳴るゝ母様の御用なれば、此數を忘却すまじき事、旦那には旦那付の小間使、名(おきく)母様には母様付の小間使(名(お駒))あれば、二つ鳴らしたる時を除く外、坐を立つに及ばぬ事、旦那様の少しく酒を召し上れども、大したることは無く、第一のお好きは盆栽、第一のお嫌ひは不機嫌の人の面なれば、心して旦那様のお怒りに觸れまじき事、われは旦那様に仕へ、日に二度づゝ母様の汚機嫌を取る外に、是といふ用なき身なれば、望みに由りては茶活花習字讀本をも授け遣るべき事など、涙の溢れるほど心切に告げ給ひし

後、一だん聲を沈ませて、當家に奉公せん中には、濱子様とて我と同じはともお年を召されたる、美しき御方おますを見るべし、濱子様の母様の御姫にして、旦那様との從兄妹の御間なれば、假令如何なる事あらんとも悪き顔見すべからず、久しき間に目に餘りて口惜し事にも遭ふならんが、只辛抱に、辛抱して、その方の御機嫌を損せざらんやうにせよ、是濱子様に勉むるにはあらず、即て我身へ竭す忠節なりと、染々語らせたる御聲の潤り、御眼の中い濕みたり、お玉の何んの故とも知らねど、只善く承はりて、この御居間を滑り出でつ、奥様の御居間の長き廊下を行き盡したる端の中二階にて、六疊と四疊半との二間あり、別に化粧の御間とも見ゆる三疊はさの小間あれど、御用なきに入るべき所ならねば善くは見す、六疊の間に紫檀の机置きて、優かに讀書したまふ、一方の明障子、一方の床違ひ棚、他の一方には青き伊豫籠吊して、その袂よりぞ比叡山如意ヶ嶽の不斷の翠は見ゆめる、こゝに居ます御方といひ、この御居間の清きといひ、景色といひ、御飾といひ、坐に入るもの先快く爽に、心も晴々とするべき筈なるに、お玉は却て陰氣に快からず、心の端に纏るものありて、暗き方へ引き入れらるゝ如く感じぬ、初奉公の悲しく心細きが爲めにていよもあらず、是には深き仔細のるべきぞ、と小さき胸を抱きながら、悄然とし

て女中部屋へ入りたりき

(二)

折柄午時や、過ぎて、何れも御用の絶間なりしと見ゆ、お菊もお駒も徒然に堪難ぬるが如く、小説本を讀みてぞありし、お菊は十八あまりならん、肥れて色白く、眼の中清しく額際廣く、いかにも性質良き生れと見ゆしが、お駒の早や二十の上を三ツ五ツも越わたるらしく、小間使にしての年も老け、色淺黒く唇薄く、眼の色鈍りて、物の云ひさま、さも意地くね悪く、心も癖みたる様見ゆき、お玉のおづくと膝行り入りしを見て

『お玉ちゃん』と冷かすが如く聲かけ

『まア此處へお來で、お前奥さんに何を云はれて來たの』と笑ひ聲、お玉のまだ人馴れぬ袂重く、双を膝の上に疊みて、答へは無く嫣然に笑ひぬ

『私、當てゝ見やうかね、れ前の奥さんに云はれた言を……』とそれとお玉の打笑ふのみ、此場合、答うべき詞なければ、只笑ふより他無きなり、

『濱子さまの事だらう、わッ、爾うだらう』と云ひ掛けて口の端に笑を含みぬ、お玉は星

をさへれて、笑ふてのみ居られず、目を圓うして軽く頷くを、お駒の得意顔にお菊を見返りて

「お菊ちゃん、私の云つた通りだらう、奥様の被仰る事なら、善く寸法が知れてるんだよ」と云ふ様憎らし、旦那様付もお駒の前には頭上らす

「眞個お駒さんの云ふ通りよ、奥さん何んだつて濱子は氣になるだらうね」

「それはお前さん云ふに云はれない理があるんだよ、お前さんにも今日までは秘して居たけれど、お玉さんも來たんだから、御當家の秘密といふのを、少しばかり話さうかね

「はア、どうか、是には必然面白い理があるんだよ

「有るともね」とお駒の一膝進めたるが、さすが憚る處あるが如く、沈と四邊を見返りたりき

お駒の物語を摘要んで記せば、濱子は後室貞子の妹の生みたるにて、年齢は二十一の花の盛り姿美はしく、父の井原建輝の控訴院判事として、大坂に在職せしが三年前に死亡て、今の母吳子の手で養はれ、兄の忠行の英國に留學中、女ばかりの家を空氣惡しき、物價高く、生存競争の甚しき商業地と置かんり、不經濟不用心の極みなればとて、一昨年

の末この京都へ移り来りぬ、家二條富小路にあれば、三本木への程遠からず、元來この濱子こそ一彦の豫婚なりしが血縁を言へば従兄妹なり、血族結婚の子々孫々に及ばず害毒、癩病、結核の甚しきよりも甚しき事、醫學の進歩に伴ひて明に爲りたれば、身体を大事に、家の名を殞すまじとの用心深き一彦、まづ其事の不可なるを説き出でたれば、濱子の父も同意して、遂に總角よりの豫婚を取り消し、一彦の他家より嫁を迎ふべく、濱子の良縁を求めて他家へ縁付べく相談一決したるなりき、一彦が雅子を迎へたるは是が爲めにして、濱子が二十一の嫁入盛りを空に過さんとせるも、亦是が爲めなり

一彦は血族結婚の恐るべきを知りて、自ら不可を唱へ出だしたる程なれば、濱子に未練の殘る筈なけれど、濱子の女心に、やゝ物心を知る頃より、お前の良人の一彦さんにてあるぞ、一彦さんのお前が借老を契るべき只一人の男ぞ、と云はれ、嬉しく羞かしく床しく懐しく成長したる心未だ失せず、豫婚の約束破れしより、此處彼處より婚姻の申し込み絶えずあれど、濱子の遂に一度も耳を傾げんとせず、母若くは他の人々より、切に勧めらるゝ時の、忽ち双の目に涙を見せて『私の一生涯獨身で暮らします』と答ふるを例とせるなり、

されど心の底深く思ひ決めし覺悟を聞かば、決して獨身にて一生を送らんとするにあら
ず、日ごとに岩崎家を訪ひ來りて、一彦の顔を見るを樂みに、機好くば斯くまでも思ふ心の
中をはのめかして、一彦の口より只一言床しき詞を聞かんと思ひ居れるなり、一彦の情の
前には命をも惜しむまじく名をも譽れをも惜しむまじきなり

(三)

お駒の斯く語り續けて、更に聲を秘めつゝ

『濱子様のいまだ御未練があるんだよ、口にも色にもお出しなさないけれど、奥様と旦那様とが、御間睦じく鴛鴦の番ひ離れぬやうにお暮し遊ばすのが、羨ましく妬ましく、腹が立つて爲らんのだよ』と云ひぬ、お玉の始めて奥様に云ひれたる御詞胸に當りて、濱子様を大事にせよ、と宣はせし此故ならん、斯る難しき關係ありての濱子様を素氣無う遊ばすこと協ふまじく、もし少しにても素氣無き御素振あらば、忽ち嫉妬故と疑はれ給ふべし、此間に立ちて、私の双方を圓く滑に、奥様の御名も損さず、濱子様の御機嫌も善きやうに勤め上げん、普通の事にもあるまじ、奉公とは斯くまで目に見にぬ苦勞あるも

のかと、そゝろに胸を痛めたりさ、

されどお菊は他事のやうに笑ひ掛けて

『さう、そんな事があるの、ちや旦那様も御未練があるのちや無いか知ら、濱子様がお來でなさると、嬉しさうなお話を遊ばすことよ』と異しさに堪へざるが如く問ひ掛けぬ

『どうして、それは些ともありませんよ、旦那様の奥様がお可憐しいばかりでお在で遊ばすんだけれど、濱子様だつて切ても切れぬお從兄妹で在らッしやるもの、打解けてお話も遊ばさうぢやないか、それに隠居様の濱子様が獨身で在ッしやるのを、大さう氣にしてお在で遊ばすしね、始めお豫婚をお破りなすつて、奥様をお迎へ遊ばす時だつて、隠居様の不具者で在らしつたのよ、昔から從兄妹夫婦のある習ひ、その間に擧きた子供が、啞聾子や不具者に極つて在ない限りの、一彥と濱子との間にだけ、忌しいことのありさうな筈の無いといふんで、餘程反對をお唱へなすつたけれど、肝腎の旦那様と、濱子様のお父様とが浮同意を爲すつたのだから仕方がない、遂に破談になつたのだから、浮隠居様の心では、濱子様を可愛さうに思し召すのは、當然、濱子様をお不憚に思し召すだけ、矢張り奥様をお憎みなさはしまひけれど、善く思し召してのお在でなさらないわ、だか

ら奥様の何んなにお辛いかわれやしないよ」と云切りぬ、お菊も始めて聞きたる言なれば目を圓うして、奥様不憫と思ふのみ、再び物の言のざりき、外には咲き後たる梅の香り幽に、鶯の花を蹴りて鳴交す聲愛らし

お駒の口はまだ止まず、更に詞を續けたり

『私も隠居様に随分長く使はれて居るから、悪く云ひ度くは無いけれど、濱子様の事になると、目も鼻も無いんだよ、それに濱子様に、少しの以前の事を思召すお心があるといふだけだ、些どもそんな事無い、旦那様に對してこそ優しい心切になさるけれど、奥様には折々意地の悪いことを遊ばすんでね、私お側に居てもはア／＼思ふことがあるんだわ、然もそれが例も隠居様の前になさるんで、奥様に道理のあるでも、隠居様の裁判、必然片手落になるんだから、奥様もさぞお辛からうと思つて、私心中をお察し申すわ』と頼邊少き雅子に同情する様、お駒も見たるほどの悪黨にてはなきが如し、お玉は聞くはど、我身の奉公の普通ならぬを思ひ、いかにして斯る憂目をのみ見給ふ奥様の心を慰め、旦那様に對し、御隠居様に對し、癖みたる心に奥様を戀の仇ともなさるゝ濱子様に對し、三方四方に障害無く、奉公の忠を盡さんかと、まづ胸を痛むるも、初々し

き心にの理なるべし。終りてお駒は我口の輕かりしを悔むが如く、お菊の今更の如く、お家の内事の入り込み亂れたるを悲むが如く、三人元として物を云はず、梅が香は愈よ深く、鶯の音色の更に優し

(四)

お玉が上りてより五日を経たる後なりき、春雨のまどく降りて、庭の白桃僅に蕾を破らんとする日、一彦の謠會の催しありとて出で行き、中隠居の折から來合せたる濱子を相手に、浮世話を爲され、雅子一人障子閉て籠めて、優に香を聴き居れる時、お玉の一葉の名刺を持ちて入り來りぬ、彼女の一日々々雅子の情に懷きて、今の怯ぢ恐れる心も無く馴々しき間に謹慎を見せて

『このお方がお越しでございます』といふ、差し出したる名刺は金色に縁取りたる立派なる物、石版摺の楷書いかめしく『休職海軍大尉小泉修藏』と記したり

雅子の眉間に、この名刺を見るより早く曇を帯びぬ、彼の嬉しからぬ人の訪ひ來りしに、まづ胸を痛めしなりき、されど義理ある間、逢ずに過ぎんやうなければ、沈みたる調

子に涙を秘して

『どうか此方へお通し申してお呉れ、』お玉の心得て

『はい』と立ち上らんとするを、雅子は慌てゝ呼び止めて

『お伴侶のあるまいね』

『はいお一人でございます』

『それで此方へ……』と香爐を掩ひて、嬉しからぬ人の坐をまづ床の間の正面に設けた

りき

即て小泉修藏の入り來りぬ、大尉といふ若々しき官名を戴けるに似ず、年齢は五十餘りなるらん、半白の髪、半白の髭、眼尻に細き皺を寄せて、つか／＼と設けの坐に就き

『今日の』と輕々し

『來らツしやいまし、善く來らツしやいました、其後の誠に不沙汰を致します、お母さ

まも相變らずに機嫌克く……』

『有難う』と瘦せて骨ばかりの身を屈め

『お蔭で皆が達者で居る、彼女も一度訪ねたいと云て居るが、相變らず貧乏暇無しで、

思ひながら心得ん、どうか宜しく云て呉れといふことであつたよ

『有難う存じます、私も一度お訪ね申さなければなりませんのを、つい多忙よかまけまして……』

『爾うだらうとも、貞子さんが達者でお在での間の、お前さんの自由に出歩くことも能きんだらう』と云ひつゝ、お玉の汲みて出した煎茶に咽喉を濡し、何か云はんとして口籠りながら

『時に雅子、今日のお前より折入つて頼まねばならんことがある』と云ひかけてお玉の方を振り返りし、お玉に心を兼ねる處ありてならん、雅子の早くも察して、愈よけを盡らせしが

『お玉、お父さま、何か啓用があるそうだから、お前のそちらへ退つてお呉れ』と云ひ切りぬ、お玉は

『はい』と答へながら雅子の口より、この人を『お父さま』と呼びたるに一驚を喫したるさま、海軍大尉の名譽ある官職なるべけれど、汚姿の褰れ、汚衣服の垢づき、汚言葉附も輕やしう見ゆる此お方が、は當家の奥様の親父にて渡らせらるゝか、京都にても岩崎機